

情報学から見たつながりと変化と安心感

柴山悦哉（日本学術会議連携会員，東京大学情報基盤センター教授）

情報学の立場から、(1) 情報技術の発展が安心感の妨げとなりうること、(2) 安心感を、主観的なものと捉えるだけでなく、社会的側面にも注目すべきこと、(3) 安心感とトラストの関係にも注目すべきことについて、事例を交えて紹介する。

1. 情報技術が招く不安感

20世紀後半から、情報技術は急速な発展を続けている。インターネットが一般にも使われ出した1990年代以降、良い意味でも悪い意味でも、社会に大きな影響を及ぼすようになった。変動性（Volatility）、不確実性（Uncertainty）、複雑性（Complexity）、曖昧性（Ambiguity）の頭文字を取ってVUCAと呼ばれる状況を招いた原因の一つが、情報技術の発展である。「つながり」と「変化」を本報告のタイトルに含めた理由の半分は、情報技術の次のような特徴が、安心感の妨げになると考えたためである。

- [つながり]世界を密につなげたことで、何か問題が発生した時に、悪影響が短時間で広範囲に波及しやすくなった。
- [変化] 技術の進歩が急激で、短時間で大きな変化を社会にもたらすため、経験したことのない状況に人々が直面することが増えた。

2. 安心感の社会性

安心と相容れないものとして不安や恐怖などがある。これらは不快なものであり、不安障害や恐怖症などの原因にもなる。一方、人が危機回避行動を取るために必要なものでもある。不安感や危機感が、人の意思決定や行動に与える影響は軽視できない。たとえば、地球温暖化の問題でも、異常気象と今までのやり方を変えること、これらのどちらにより強く不安を感じるかで、カーボンニュートラルに対する態度や考え方が変わってくる。

同様に、安心の影響も大きい。安心して発言できる環境、安心してリスクを取れる環境、安心して子育てができる環境などの有無によって、生き易さが変わる。学術や産業の発展にとっても、安心してチャレンジできる環境は重要である。安心してチャレンジできる環境が、「変化」を生んでいるとも言えるだろう。このような安心感の価値にも注目すべきである。

3. 安心感とトラスト

信じられない相手と共同作業を行うのは難しい。それでも行う場合には、リスクに備える必要があり、必然的にコストが嵩む。インターネットで通信ができるだけでは、遠く離れた人々が安心して共同作業を行えるようにはならない。たとえば、オンラインの商取引でも、「接続している相手は本物か?」、「安全に送金できるか?」、「サイバー攻撃で盗まれないか?」等の不安が大きいと、うまく機能しなくなる。今日、オンラインの商取引が普通に行われているのは、トラストを確立する技術がいろいろ開発され、制度整備も行われたからである。トラストを確立することで、安心して社会活動を行えるようになり、それが「つながり」を生んでいるとも言えるだろう。このような関係にも注目すべきである。